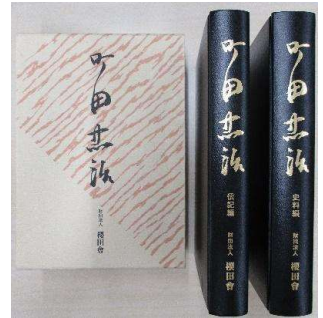


町田忠治伝記と櫻田會

櫻田會には屢々訪れて、小楠正雄理事長・鈴木哲夫理事などの方々と話をしたり、お願いをしたりした。その発端は、昭和五十八年に私の秋田高校一年先輩の深浦昭夫氏が、どういうキッカケか、私を小楠氏に紹介したことであった。この年一月十三日に小楠氏から、彼自身の経歴——新聞記者から翼賛会事務総長横山助成の秘書などをして、戦後民政党本部の敷地・建物(戦前から財団法人になっていた)を引き継ぎ、建築会社と共同でビルを建てたなど——を伺った。当時は、その償却も終わっており、櫻田會は政治研究の助成などの公益事業をしているとのことであった。



その研究助成は、私学の研究者を対象とするもので、国立大学である東大教授の私には無縁のものであったが、屢々櫻田會に出入りし、小楠・鈴木お二方とお喋りをするなかで、私の周辺の若い研究者に援助をして欲しいと無理を承知でお願いして、お二人のご厚意で時々非公式にご承諾下さったこともあった。

これは後のことになるが、会の理事であられた田川誠一氏のオーラルヒストリーを田川氏の要望で行った。伊藤光一氏の紹介で始まり、平成十年九月から平成十二年三月までの毎月、全十九回を会の会議室で行ったのである。聞き手には伊藤光一氏のほか楠精一郎氏、田中善一郎氏、佐道明広氏が加わり、また田川氏が補佐として池田偵一郎氏、森田敦夫氏も数回参加された。その冊子を開くと、私が書いた「あとがき」に「いつも笑顔で応対して下さった竹村祥子さん」とあり、当時を懐かしく思い出す。

また、私が編纂していた『斎藤隆夫日記』上・下(中央公論新社、平成二十一年)の編纂過程で、資金が不足して困っていたときに、櫻田會が資金援助をして下さって、お陰様で出版に漕ぎ付けることができた。今でも感謝している。

さて、昭和六十一年に櫻田會が創立五十周年を迎えるに当たり、記念事業の一つとして、創設の中心になった町田忠治・大麻唯男・松村謙三の伝記編纂が企画され、それぞれが、私(東大)、中村勝範(慶應)・木村時夫(早稲田)の三人に依頼された。前述のように櫻田會は私立大学の研究者等に助成を行うなど私学との関係が深いなか、私が依頼されたのは、経緯は知らぬが異例であったように思われる。序文に小楠氏は「(町田)翁の母校東大」の私に委嘱したと書いているが、同じく東大出身の大麻唯男の伝記は慶應の中村勝範氏に依頼している。

屢々出入りしていた私は即座に『町田忠治』の伝記編纂の事業を引き受け、柴崎力栄(明治学院大学の非常勤講師、完成時には大阪工業大学助教授)・季武嘉也(東京大学助手、完成時には創価大学助教授)・山室建徳(学習院大学非常勤講師、完成時には帝京大学講師)(後に照沼康孝<文部省教科書調査官>)もら若き学者諸氏に分担してもらうことにしてスタートした。

同年六月に最初の会合を開き、かつて松村謙三によって編纂された『町田忠治翁伝』の編纂過程(小楠さんは助手として参加されていたのであった)で用いられた史料にアクセスすること

から、史料収集を始めることにした。早速町田の遺族に連絡したところ、関係史料は全くないという。ついで松村謙三の遺族に連絡したが、こちらからも町田の関係史料はないという返答があり、これに依存することは不可能とわかり、自分らで最初から史料収集を行わねばならぬと決意したのであった。

そこで、翌昭和六十二年三月に全員で町田の出身地秋田に赴いたのであった。三月二十日から二十五日まで、秋田魁新報社、町田の支持者であった清酒太平山の一族児玉家、その一族の小玉得太郎氏、県立図書館、町田の親族町田得三氏(町田の墓地、公園になっていた旧町田邸を案内して下さった)、町田の支持者深浦氏の父親宗寿氏の親戚、やはり支持者であった加賀屋保吉氏、県議会図書館、地盤であった大館の市史編纂室、北鹿新聞社、比内町の支持者であった沼田信一が社長を務めた『北鹿朝日新聞』を所蔵する町史編纂室、その室長石井博夫氏、沼田の複数の遺族等を歴訪して、町田の書簡や町田関係の新聞記事、町田の執筆したもののコピー、町田についてのインタビューなど多くの成果を得ることができた。さらに、東京で得られた多くの史料、帝国議会会議録、町田の著書や雑誌への寄稿、関係した会社やさまざまな団体の歴史書、関係した人物の日記や回想録などなどの蒐集を精力的に行った。秋田での史料調査はその後も続けられた。

こうした史料に基づき、各人が分担した時期(柴崎一明治期、季武一大正期、山室一昭和初期、照沼一二・二六事件から死去まで)を中心に報告し、数年に亘ってかなり激しい討論を行った。当初は平成二年には書き上げるはずであったが、原稿執筆が遅れ、また他の二つのプロジェクトの進行も遅れていたため、完成時期を延期してもらうことになった。また史料調査で集めた町田書簡、町田の書いた文章も大量になったため、別に史料編を作りたいと櫻田會にお願いして了承された。

平成三年から四年にかけて原稿の執筆を進め、それを印刷所に入れ始めた。その後も原稿の追加、私の「はじめに」の執筆、史料の追加、校正作業、凡例など付き物の作成、写真の選定、それに史料の掲載許可の手続き、印刷所(新日本ニュース社)との打ち合わせが続いた。大体まとまった平成六年秋に、富山県福光町の松村謙三記念館に『町田忠治翁伝』の編纂に使われた史料の一部が存在しているという情報が入り、完成をまた一年延期していただくことにした。しかし、我々(栗田直樹氏にも来て貰った)が駆けつけたときには、その多くが既に松村謙三伝のグループに借り出されていて、見ることはできなかったのは残念ながら僅かであった。

この間我々の作業の遅れを忍耐強く待ち続けてくださっていた小楠理事長が平成七年七月に亡くなられるという大変残念な出来事があった。この時期には作業はほぼ終了していたが、『大麻唯男』と同時刊行とするため、『町田忠治(民政党総裁)』伝記編・史料編は、翌平成八年二月刊行となった。

町田忠治は明治維新の後の第二世代で、日本の近代化を推進する熱心な活動家であった。秋田の士族の家に生まれ、子どもの頃は漢学的な教育を受けたが、やがて学制改革後の近代教育制度のもとで学び、最終的に帝国大学法科大学選科を修了、さらにイギリス留学を通じて当時の最先端のエリートコースを辿る。その後、官僚、ジャーナリスト、『東洋経済新報』社の創立者、銀行家、政治家とさまざまな分野で活動したが、その目指すものは基本的に、日本の産業の近代化、工業国家の形成発展にあった。

政治家としては権力追求型ではなかった。昭和十年代の日本が、軍部を推進力とする統制経済に傾斜するなか、心ならずも民政党総裁に担がれる。一方最後まで政治新体制に抗し解党を拒んだが、他方最終的にそれを余儀なくされ、大政翼賛会、大日本政治会の顧問という役割を演じることになる。敗戦後、翼賛政治会を改組した日本進歩党の総裁に担がれたものの、戦中期、形式上は高官の地位にあったことから「追放」を免れず、高齢も相俟って、追放後まもなく昭和二十一年に病没した。その点では悲劇の政治家という以外にない。このような近代日本の形成者の一人町田忠治の伝記を編むことができたのは、櫻田會の功績であろう。

東京大学名誉教授 伊藤 隆